

巻頭言

共生社会文化研究所長 福島 哲夫

共生社会の実現に欠かせない「多様性」と「社会正義」への視点

今の社会がどれだけ多様化しているかに異を唱える人はいないでしょう。より正確には、以前から多様だった世界の実相が、やっと最近になってしっかりと多くの人によって認識されるようになってきたと言うべきかもしれません。そして文化や価値観、信念、生活環境、そして社会的背景の違いが、私たちの社会を豊かにしている一方で、時にそれが課題も生んでいることも周知の事実です。私は、このような多様性を尊重し共に歩んでいくためには「社会正義」が重要だと考えます。ここで言う「社会正義」とは、決して「正義を振りかざして悪を断罪する」というようなものではなく、「不平等をそのまま放置せず」「不平等や不公正が無意識のうちに広がらないようにする」姿勢のことです。

しかし、近年、世界的に反多様性の流れも強まっており、それが私たちの目指すべき共生社会の実現という理念に対して大きな挑戦を投げかけています。この流れに対抗するため、私が専門とする心理学の分野でも、社会正義に関してようやく明確な意見や研究が出始めています（たとえば和田・杉原ら、2024）。今、社会学・心理学・社会福祉学の知見を活かした社会正義へのアプローチが、ますます重要になっていると言えるでしょう。

多様性の重要性とその受容

「多様性」とは、ただ単に異なる人々が存在しているということではなく、その違いをしっかりと認識し、尊重し、共に生きる力を育むことを大切にする言葉であると思います。それぞれが異なる文化や価値観、性別、性自認、年齢、障害の有無など、さまざまな違いを持っていることを理解し、それを社会全体で活かしていくことが求められます。多様性を受け入れることで、社会はもっと豊かで、強くなるはずです。心理学の研究でも、異文化理解や社会的共感の育成が大きなテーマとなっており、異なるバックグラウンドを持つ人々と接する機会が増えると、偏見やステレオタイプが減り、社会的共感が深まることがわかっています（Allport, 1954）。

心理学に限らず社会学でも社会福祉学でも、私たちが他者との違いをどう認識し、それをどう扱うか、つまり偏見や差別をどう解消するかに関する知見を提供しています。この知見は、教育や政策に活かされ、社会全体で多様性を尊重し、共生するための基盤となることが期待できます。

社会正義と心理学：不平等の認識とその解消

「社会正義」とは、究極的にはすべての人が平等に機会を得、権利を享受できる社会を目指すことです。しかし現実には、貧困や差別、教育格差、雇用の不平等などが今も根強く存在し、それらが個人の生活や心理的健康に深刻な影響を与えています。特にマイノリティ（ここで言うマイノリティとは、単に社会的なものに限らず、心理的なマイノリティを含みます）の人々は、日々社会的な不平等を感じており、それが精神的な健康や生活の質に影響を与えることが知られています。この問題に取り組むためには、社会全体で意識を変え、共に解決していく必要があります。

心理学では、社会的な不平等や差別が個人の心にどんな影響を与えるのか、そしてそれにどう立ち向かうかを探る研究が遅ればせながら進んできています（Williams et al., 2010）。このような研究は、

差別や不平等を解消するための政策や社会支援の必要性を浮き彫りにし、社会正義の実現に向けた基盤を作ります。社会を変えるためには、個人の意識改革だけでは不十分で、制度的な改善が不可欠です。例えば、教育の機会均等や、職場での平等な待遇、政治参加の促進、さらには近年「マイクロアグレッション」と言われる、日常の中での無自覚な差別や偏見の解消などがその一部です。

これまでの心理学の研究は、主に個人の心の中にあるメカニズムに焦点を当ててきましたが、最近では上記のように社会的不平等や差別にも注目が集まっています。とはいえ、社会にのみ不平等や差別の原因を帰するのは、これもまた偏見というべきでしょう。心理学者としては、社会と個人の両方に目を向け、どちらも大切にしていきたいものです。

最近の心理学における動向：共生社会に向けたアプローチ

ここまで述べてきたように、近年、心理学の研究では多角的に多様性と社会正義を捉える視点が取り入れられてきています。特に「共感」や「インクルージョン」に関する研究は、社会的偏見を減らし、異なる背景を持つ人々が協力できる社会を作るための実践的な方法への模索として大切なものでしょう。共感的なリーダーシップや共感を基盤にした教育プログラムの効果の検証は、特に教育や職場における多様性を尊重する環境作りに貢献すると期待されます。

また、社会心理学では「社会的アイデンティティ理論」を使って、個人の社会的アイデンティティがどのように集団間の対立を生むのか、そしてそれをどう解消できるのかを探る研究も進んでいます。共通の目標や価値観を持つことが、異なる集団間の協力を促進することが示されています。これらの知見は、異文化共生を進めるために非常に重要な指針となるでしょう。

反多様性の世界的動向とその影響

一方で、反多様性の動きが世界的に広がりを見せています。特に欧米では、移民や難民に対する排斥感情やLGBTQ+コミュニティへの反発が強まり、民族や宗教に基づいた差別が深刻化しています。ポピュリズムの台頭とともに、多様性を脅威と感じる声が増し、「国境を守る」「伝統的な価値観を守る」といったスローガンを掲げた政治運動が広がっています。

こうした動きは、社会的な分断を深め、対立を引き起こす原因となっています。例えばアメリカでは移民政策への反発が強まり、ヨーロッパではEUへの懐疑的な態度や民族主義的な主張が増している様子です。日本国内においても、SNSを中心に繰り返られる非寛容と分断は、深刻なものがあると感じています。これらは、社会正義や多様性の受け入れを基盤とする理念に逆行しており、心理学的にも深刻な影響を及ぼしていると考えられます。差別や排除が強化されることで、社会的孤立感や恐怖、憎しみが増し、心理的健康にも悪影響を与えるからです。

反多様性の流れに対抗するための心理学的なアプローチとして、人々の認知や感情、社会的影響を理解し、共感を育む教育や対話を進めることが求められます。また、心理学的な介入を通じて、人々が異なる背景を持つ他者とどう協力し、共に歩むかを学ぶことが、社会的な分断を乗り越えるための鍵となるでしょう。

多様性と社会正義の統合的アプローチ

私たちが目指す社会は、「多様性」と「社会正義」が相互に支え合い、強化し合う社会です。共生社会文化研究所の研究者・特別研究員たちが行っている社会学・心理学・社会福祉学を基礎とした研究は、個人の行動や集団間の関係を理解し、共感を育む方法を提供し、社会正義の実現に向け

たものです。反多様性の動きに対しても、これらの学問的・実践的なアプローチを通じて対話や教育を進め、社会的共感や協力を促進していく必要があります。多様性を尊重し、不平等を解消するための取り組みが、共生社会を築くための最も重要なステップと考えます。

おわりに

共生社会文化研究所が掲げる「共生社会の実現（と文化の醸成）」という理念は、多様性と社会正義を実現することによってのみ達成に近づくと考えます。私たちは、異なる価値観や背景を持つ人々と共に学び、成長し、より豊かな社会を築くことを目指しています。反多様性の動向は、確かに共生社会に対する大きな挑戦ですが、それに立ち向かうためには、社会学、心理学、社会福祉学の知見を活かし、共感と理解を深めることが欠かせません。共に学び、共に考え、共に行動することで、より良い社会の実現に向けて力を合わせていきたいと心から願っています。

